



説教要旨「止まない雨は無い」



ヨハネによる福音書 16章 12～24節

イエス様は弟子たちに「言っておきたいことは、まだたくさん」(12節) ありました。けれども、今はまだ弟子たちが理解できないから、全ては話さないというのです。弟子たちが理解できない理由。それは彼らが、自分がイエス様を見捨てることなどないと思っているからです。自分がイエス様のことを見捨てて生き延びるなんてあるはずがないと思い込んでいる弟子たちに、イエス様が十字架にかけられる意味や、弟子たちに託される思いを伝えようとしても、彼らは理解できないのです。

イエス様は翌日には十字架に架かって死にます。その時、弟子たちは「泣いて悲嘆に暮れる」(20節) のです。イエス様の十字架の死は、弟子たちにとって、自らの罪を突きつけられ、もはや取り戻しようのない絶望でした。けれどもイエス様の十字架の死は、最後の結末ではなくその先がありました。イエス様は復活なされたのです。そして、いつまでも弟子たちと共におられることを宣言されるのです。弟子たちの悲しみはほんのしばらくのことであり、「その悲しみは喜びに変わる」のです。

わたしたちがこの地上の生涯で味わう悲しみもそうです。その悲しみのただ中にいる時、わたしたちは他のものが何も見えないほどに、その悲しみに囚われます。その悲しみを乗り越えた未来に目を向ける余裕などありません。しかしイエス様は、その悲しみは未来永劫続くものではなく、ほんのしばらくの間のことなのだと言われているのです。

悲しみ、苦しみのただ中ある時、目の前つらい現実に囚われて、他は何も見えない、何も聞こえない、これがずっと続くと感じてしまうものです。そのような人に「あなたのその悲しみは、しばらくの時だけです」と言っても、「人の気も知らないで」と反発されるだけかもしれません。祈りだってそうです。悲しみの極みの中にいる人は、祈ることさえ出来なくなるものです。その時、その人のために、その人に代わって、「しばらくの間である」ことを信じて、祈ること。それが、イエス様に救われたわたしたちの務めなのではないでしょうか。

(2022・5・22 説教者：稲垣真実)